西大和学園中学校高等学校 オークン

SG研究I
高校1年生

海外探究プログラム

◆インド

現地の学生は１対１でのやり取りで英語を使って流暢に操り話しかけてきた。とにかく前のめりで物事を捉えようとしていて、自分が１の質問をすると１０のことが返ってきた。夏休みのアメリカホームステイ、インドの学校交流と様々な場所で英語でコミュニケーションをとる中で、自分は今までに１の質問に１もしくは０.５の返答しかできていなかったと思う。通じなかったらどうしようという不安からYES、NOを多用していたが、今回のDAVの交流では自分から質問ができ、通じたときのよろこびは大きかった。待っていても何も変わらないし、チャンスも逃すという当たり前のことだけれども改めて実感できたので、自分が変われるチャンスを得たような気がした。いつか１の質問に１０で返せる英語力をつけるため貪欲に学んでいきたい。
（C組 中井陶介）

インドは、多くの人がおり活気はあった。だが道端に捨てられているゴミによる異臭はその驚きを圧倒した。大気は曇り、車のライトの光の筋がはっきり見えるほどであり、マスクをせざるを得ない状況だった。だが次の日の朝、ホテルを出ると意外とマスクをしなくても過ごせた上、匂いも多少気になったものの初日ほどではなかった。それは都市部の話だけでなく、スラムと呼ばれるような場所に住んでいる人々もそうである。道端にはゴミが散らかり、水はどす黒い色をしており、家の壁はボロボロだった。自分たちから見れば劣悪な環境であり、到底生活できないような場所でも、そこに実際住んでいる人から見ればいつもどおりの生活風景だということが自分の中ではショッキングだった。
（B組 田中宏次朗）

◆カンボジア・ベトナム

SALAーSUSUというカンボジア人の若い女性たちが、将来職に就けるように手助けをする日本の企業を訪問した。「企業のために働いてもらう」というより「働いている人が将来幸せになるために働いてもらう」という「誰かのために」という考えがにじみでている会社で、このような考え方を自分自身の人間性にも反映させられるようにしていきたいと感じた。カンボジアでは現地の人々の生活環境や経済的な面で自分から見ると不十分だと思ったが、彼らの幸せそうな笑顔を見る度に「そんなことはもはや関係なく、結局そこに暮らしている人が幸せだと思えるか」が一番大切なのだと感じた。
（A組 石原隆太郎）

それぞれの国の文化や歴史、社会的活動について見聞きした。文化や歴史はその殆どがインターネットで調べることが可能だが、実際に行われている支援プロジェクトや福祉活動、また遺跡の復興作業は現地に赴かないとなかなか実感できるものではなかった。両国ともまだまだ未開拓で、私達からすると非常に不便で不衛生に感じる場所が多くあった。それ故に、都市に住む市民と比べて低所得で生活の水準も低い農村部の生活は苦しいものであるようだった。しかしそれらを改善すべく、新しい現地産の商品を作り、または伝統産業を復興させて雇用を生み出し、貧しい農村の住民の生活を改善しようとする試みが見られた。
（1組 大釜一未）

模擬国連

全日本大会に出場しました！

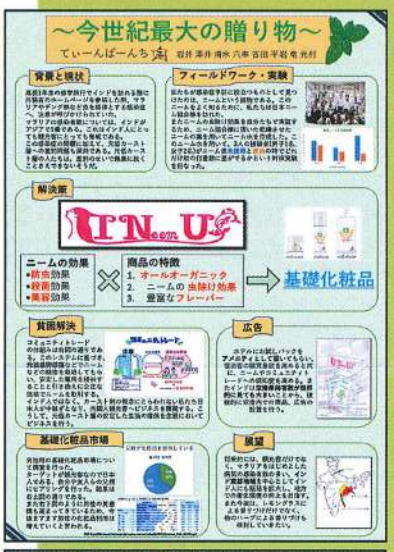
11月17日(土)～18日(日)に東京・国連大学で行われた「第12回全日本高校模擬国連大会」に高２生４名（１組安田薫、２組澤井珠希、５組田村幹太、水野竣介）が出場しました。今年度の議題は「武器移転」というテーマでしたが、安田・澤井ペアは韓国大使として、田村・水野ペアはロシア大使として、多くの他国の大使とこの問題に向き合い、解決策を模索しました。４人とも今まで参加してきた会議以上の最高のパフォーマンスをし、２日間自信にあふれた表情で議論をしました。他国の大使の言うことに大きくうなずきながらグループの議論を進めていた姿も印象的でした。

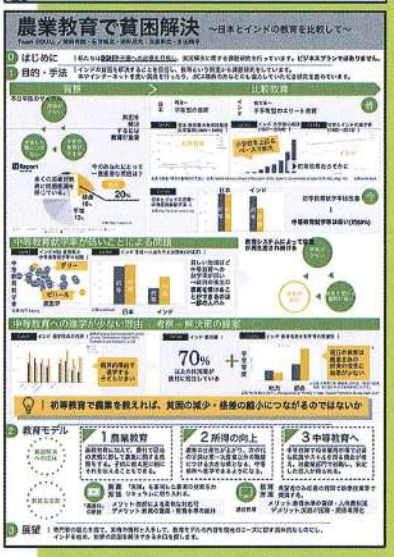
結果は２カ国とも入賞はできず、悔し涙を流す生徒もいましたが、一方で「悔しいけどやりきった。悔いはない」と達成感に満ちた表情をしていました。次は、この経験を後輩たちに伝え、彼らが果たせなかった「ニューヨーク行き」を託します！

SG研究Ⅱ
高校2年生

第１回校内研究発表会

10月20日(土)に今年度はじめての校内研究発表会が開催されました。昨年度、プレゼンテーションスキルを学び、ビジネスプランのアイデア出しの練習を行ってきた成果を、大勢を前にした自身のビジネスプランの発表という形で披露できた良い機会となりました。





■生徒の感想

・リハーサルを経て迎えたこの発表会ですが、想像以上に厳しい評価だった。利益が出るかどうか以前にそのビジネスが誰のためになるのか、目的の不確かさを痛感した。農村部の人のためというより自分たちのためにビジネスプランを作っていたのかもしれないと気づき、本来の目的を見失っていたことを反省した。再度、農村部の人たちに何ができるのかを見つめ直しながらまた頑張っていきたいと思う。

・今回の中間発表に合わせて、チームの課題研究を進めることができ、ある程度の目処を立てることもできたのでとても良かったと思います。また、ポスターを作って発表準備を進める上で、先生方からアドバイスをいただき、今後の指針がより明確になっていきました。準備の段階では、自分たちが活動してきたことを一枚のポスターに収めることの難しさを実感しました。一枚のポスターを作っていく中でチームのメンバー内での情報共有や、研究内容の向上を図ることができました。いかにして自分たちの研究内容を聞き手に理解してもらえるか、ということに重点を置き、本やインターネットを参考にしながらデザインしました。結果としてポスターは評価していただいたのでその点は成功したと思います。また発表に関しても、あえて質問形式にしたり、具体例をいれてわかりやすくしたり、工夫できるところは工夫しました。

・自分たちの伝えたいことやプランの概要を時間内にプレゼンするのはとても難しいことだと感じた。聞いてもらいたいという気持ちだけでは成り立たないという事も感じた。あと数回発表の機会があるので、回を追うごとに成長していけたらいいなと思う。

※校内研究発表会は今年度、あと２回開催します。

High School Students Summit on"World Tsunami Awareness Day"2018 in Wakayama

10月31日～11月1日の2日間、和歌山で開催された「世界津波の日」2018高校生サミットに参加しました。

私は高校生サミットの参加を通じて、様々な事を学びました。言葉や文化が異なる人たちが集まり、津波対策という共通の目標のもと英語を使ってディスカッションをした時間は非常に刺激的でした。津波対策は長く議論されてきた内容である為、二日間という短い期間の中で宣言文としてまとめ上げることに苦労しましたが、各校のプランからお互いの良い点をまとめブラッシュアップしていきました。「高校生らしさ」という縛りに苦労する面もあったものの、国際性豊かな討論が出来た点でその1秒1秒は今後の人生において非常に価値あるものでした。世界中から集まった同じ年代の人たちと価値観を共有でき、このプログラムの意義を見出すことが出来ました。

(H2-2 六車旭)

分科会で気がついたのは、議論は個人の英語力に限定されないということです。これは否定的な意味でなく、議論の質、話そうとする意欲、さらには聞き役ですら積極的であるのではないかと私は考えました。相手に理解してもらえるよう、聞いてもらえるように話す努力、また議論の幅を広げるようなアイデアを出したり、相手の話を忠実に聞こうとする姿勢がそれに当てはまると思います。これからはこの経験を生かしていきたいです。

(H2-D 岡田凪彩)